

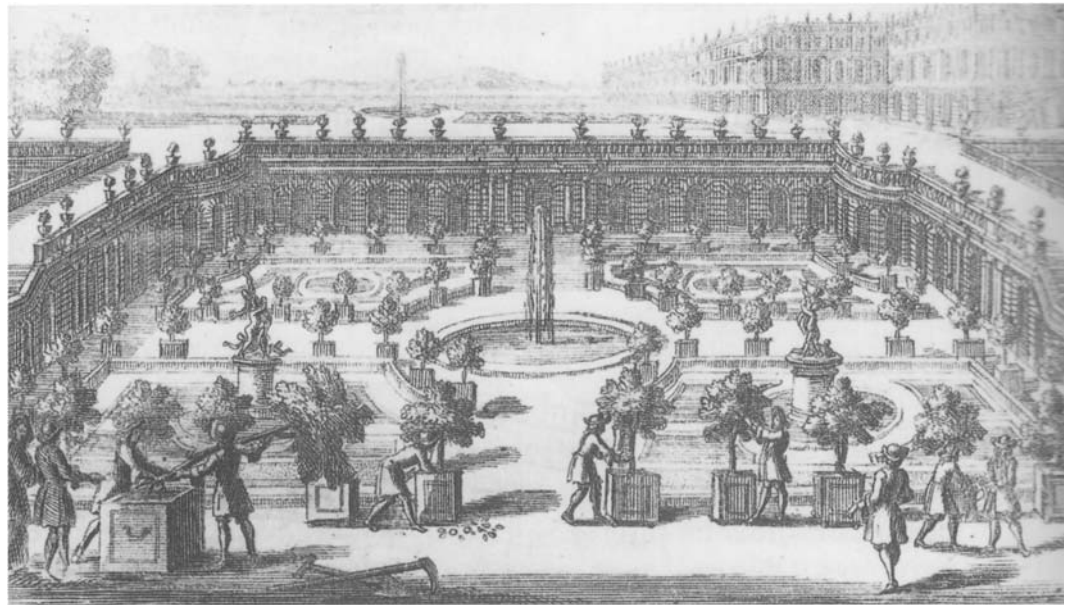
オレンジの木は香料の宝庫

中村祥二 (会長)

パリに行くと、大人の腰の高さほどの大きな四角い鉢に植えられたオレンジの木を見かける。この木組みの植木鉢は普通の植木鉢に比べると、極端に大きく据え付けておくものといった感じがする。バラで名高いジャルダン・ドゥ・バガテルの温室の側にもあったし、ベルサイユ宮殿の周りでも見かけた。代表的

なものはチュイルリー公園のそばのモネの睡蓮の絵画で有名なオランジュリー美術館の周りである。元々ここはオレンジの温室だったところである。東南アジア原産のオレンジを冬のパリの寒さから守るには温室が必要であった。

17世紀ごろのお城には、入り口を飾るために必ずオレンジの木があった。南国のエキゾチックなこの植物を客の目に触れるところに配することはおしゃれでもあったし、歓迎のしるしでもあったのだ。この大きな鉢植えを、温室やホールなどの場所にどうやって移動させたのか、それなりの道具立てが工夫されていたはずである。オレンジの専門書を読んだとき、二輪の車に乗っている木組みの鉢を見かけたことがある。



ベルサイユの温室前でオレンジを植える庭師たち

『OR ORANGES ORANGERIES』より

誰からか覚えていないが、オレンジの木の面白い効果を聞いたことがある。お城で舞踏会が行われた時代、オレンジの木を会場に入れておくと、そこで踊る紳士淑女たちの汗の臭いを和らげたというのだ。脇の下の汗のニオイを抑えるデオドラントがなかった時代に、日本人より体臭が強いヨーロッパの人達が、踊りながら発する汗のニオイの雰囲気は想像できる。

太陽王ルイ14世とその宮廷ではオレンジの花の香料を用いた消臭剤を撒くようにふんだんに使っていたようだ。それに1年中、宮殿のあちこちにオレンジの花と皿にのせたオレンジが置かれるようになったという記述にぶつかった。本当らしい。

春にニューヨークのマンハッタンの北、ハドソン川を望む高台にあるクロイスターズ美術館を訪れた。ここはメトロポリタン美術館の1部であり、ヨーロッパ中世の建築様式や美術品で知られているが、多種類の花やハーブ類が見られるのは有名なところである。たまたま花の付いたオレンジの鉢植えが回廊に置かれていて、花や葉から爽やかな香りが辺りに広がっているのを感じた。この香りの雰囲気なら汗臭を隠せそうだと実感した。

南仏ではオレンジの白い花から香料をとる。摘んだ花から溶剤で香り成分を取り出すと赤褐色の液体の香料が採れる。甘く爽やかで、それでいて華やかな広がりのある香りである。水蒸気で香りを追い出して取り出す方法もある。香り成分は集められた水の上に浮いてくる。これをネロリという。上澄みのネロリを採った後の水も、花の良い香りを溶かしこんでいて、これがネロリウォーターになる。ネロリという名前は日本ではあまり知られていないかもしれない。

この花の香料が歴史に登場するのは16世紀半ばのことである。ネロリと呼ばれるようになったのは、17世紀末、イタリアのローマ郊外のネロラの王女オルシニ公爵夫人がこの素晴らしい香りを流行の香りとして、ヨーロッパの宮廷に紹介したのがきっかけだった。この香りが上流社会の人気を得たことで、南仏グラーズの香りの良い花の栽培が盛んになり、グラーズは香料のメッカと言われるようになっていった。現在でも重要な花の香料であり、クラシックのオーデコロンばかりでなく、チュベローズやスイセンなどと共に使われて1975年ごろから世界的に流行した白い花の香りの花束を意味するホワイトフローラルタイプの香水に欠かせない天然香料となった。

苦味のある果実と果皮からマーマレードを作る。果皮からはオレンジの香料も採る。葉から採る香料は、私たちの身の回りにあるミカンやダイダイやユズの葉をちぎって指先でもむだ時の渋さのある爽やかな香りを放つ。

かつて汗臭さや悪臭を消すのに使われていたオレンジの木は、現在、香料の宝庫であり、私たちに豊かな香りを与えてくれるのである。